

学 位 論 文 要 旨

氏 名 米 崎 里

題 目 An Empirical Study on the Effectiveness of Output Activities Focused on Oral Reading for Improving EFL Learners' Speaking Skill
(スピーキング力を高めるための音読を軸としたアウトプット活動の有効性に関する研究)

学位論文要旨 (和文 2,000 字又は英文 1,000 語程度)

本研究はスピーキング力を高めるための音読を軸としたアウトプット活動の有効性に関する実証研究を目的とした。

本研究は理論的研究と実験的研究の2部構成からなっている。理論的研究としてはじめに、英語教授法の歴史の中で音読がどのように扱われてきたかを調査した。そして、スピーキングプロセスと音読プロセスの先行研究を行い、本研究の音読のプロセスとスピーキングのプロセスを確立した。音読プロセスとスピーキングプロセスの中で、共通要素を明らかにした。普通の音読では、スピーキングとの共通要素はあまり見られないが、「顔上げ音読」や「なりきり音読」のプロセスの中には、再構成(restructuring)や再確認(verification)の要素がそれぞれ含まれていることを明確にした。再構成や再確認の要素はスピーキングプロセスに含まれる言語化(encoding)の要素と同じではないが、学習者が意味的・文法的要素に注意を払うという点で言語化の要素に近い。言語化の要素に近くなれば、それだけ学習者の認知的負荷が高まる。したがって、「顔上げ音読」や「なりきり音読」は、普通の音読と比べて、理論上、認知的負荷が高い音読活動(taxing oral reading)と定義した。しかしながら、「顔上げ音読」に伴う再確認や、「なりきり音読」に伴う再構成は、必ずしも学習者がそのプロセスを経るとは限らない。意味を考えずに音読する場合はそのプロセスを経ず、したがってそのような場合は学習者の認知的負荷が高まらない。そこで、本研究は音読活動の応用版であり、常に学習者の認知的負荷を高める活動として、「なりきりQ&A」を提案した。

実験的研究として3種類の実験を行った。はじめに、認知的負荷が高いとされる音読活動を行っている間、普通の音読と比べ、実際学習者により高い認知的負荷がかかっているかどうかを検証した。その結果、認知的負荷が高い音読は、普通の音読と比べ、音読時間がかかり、ポーズをとる時間もかかった。さらに読み返す回数やポーズをとる回数も多く、有意差が認められた。したがって認知的負荷が高い音読は実際学習者により高い負荷がかかっていることが判明した。同時に、認知的負荷の高い音読は、普通の音読より、音読直後の短期記憶の単語保持率にも貢献することが分かった。

2つ目の実験は、同じ音読でも認知的負荷が高い音読ほどスピーキング能力との関係が深くなるという仮説を実証することを目的とした。普通の音読、「顔上げ音読」、「なりきり音読」と顔上げ音読を組み合わせた音読の3つの音読の中で、どの音読がスピーキング力に一番深い関係があるかを2回実験した。その結果として、1回目の実験では、「顔上げ音読」と「顔上げ音読となりきり音読の組み合わせた音読」が、2回目の実験では「顔上げ音読となりきり音読を組み合わせた音読」だけがスピーキング力への貢献があるという結果になった。2つの実験の結果は、多少異なったが、同じ音読でも認知的負荷が高い音読ほど、スピーキング能力との関係が深いという本研究の仮説がほぼ支持された。

3つ目の実験は、認知的負荷の高い音読を一定期間の間行えば、学習者のスピーキング力は向

上するという仮説を実証することを目的とした。高校生を対象に、授業のはじめ 15 分間普通の音読だけを実施した統制群と、「顔上げ音読」、「なりきり音読」、「顔上げ音読となりきり音読を組み合わせた音読」、「なりきり Q&A」といった認知的負荷の高い音読を実施した実験群の二グループに分け、2 ヶ月にわたり実験を実施した。その結果、実験群の方がスピーキング力に向上が見られ、また有意差も認められた。さらに、3 つのグループに分け（普通の音読のみを行ったグループを統制群とし、「顔上げ音読」、「なりきり音読」、「顔上げ音読となりきり音読」を組み合わせた音読を行ったグループを実験群 1 とし、実験群 1 の音読活動に加え「なりきり Q&A」を実施したグループを実験群 2 とした）、6 か月にわたる実験を実施した。その結果、2 か月後は統制群と実験群 2 の間のみ有意差が認められた。さらに 6 か月後では、統制群 1 と実験群 2 だけでなく、統制群 1 と実験群 1、実験群 1 と実験群 2 にも有意差が認められた。「顔上げ音読」や「なりきり音読」はスピーキング力向上までには時間がかかるが、認知的負荷の高い音読である。したがって「なりきり Q&A」のみならずこれらの認知的負荷の高い音読を一定期間行えば学習者のスピーキング力向上に貢献するという仮説がほぼ支持された。

以上、本研究では従来から使われている音読をスピーキング能力を高めるための手段として再評価し、その有効性を検証することができた。音読そのものはスピーキング活動ではないが、クラスサイズが約 40 人であるという日本の英語学習環境を考えれば、音読を軸としたアウトプット活動はスピーキング力を向上する活動として有効であるということが提言できた。